平成２８年度金沢大学退職者懇談会挨拶

平成 28 年 3 月 28 日
金沢大学理事・副学長
柴田正良

　ご退職された皆さま、この度は、恙なく長年のお勤めを終わられたことに、金沢大学を代表して、深く感謝申しあげるとともに、心からの敬意を表します。

お疲れ様でした。

　さて、何かが終わるということは、何かが始まるこということだと思います。日本では、それは春という季節に生じ、桜の花とともにわれわれに訪れます。ですから、春というのは妖しい季節です。死と再生、誕生と消滅、希望と不安が交錯する中から、皆さん方の新しい門出が始まります。

　平安時代末期の歌人、西行法師は、あの有名な歌の中で、桜の美しさを春のこの妖しさ、ある種の眩暈として詠んだのではないか、と私は秘かに考えています。

願わくは　花のもとにて春死なむ　その如月の望月のころ

死と消滅が、桜の下で、再生と誕生に変容していくという予感でしょうか。
　また、大正時代の小説家、梶井基次郎は、桜のあまりの美しさを怪しみ、「桜の樹の下には」という短編を書きました。その書き出しは、「桜の樹の下には屍体が埋まっている！」という衝撃的な一行でした。そのような尋常ならざるものとの引き換えなしには、桜のこの圧倒的な美しさは理解できない、というのです。

　いずれにせよ、春は、新たな何かが少なからぬ痛みを伴って始まる、目覚めの季節のようです。そこで最後に、皆さまと私たちの双方が，身を引き締めてこの４月からスタートを切れるように、もう一つだけ詩を引用させて下さい。それは、この時期になるといつも私の頭に浮かんでくるもので、イギリスの詩人、T.S.エリオットが 1920 年代に書いた「荒地 The Waste Land」という詩の冒頭の数行です。

４月は残酷極まる月だ
死んだ土地からライラックを育て上げ
記憶と欲望をないまぜ
鈍重な根を春雨で刺激する
冬は僕たちを暖かくしてくれた
地表を忘却の雪で覆いながら

　というわけで、皆さまと一緒に、この春の嵐の中、暖かくて寒い、なお暗いけれどもはや明るい、そんな混沌とした４月からの生活に、希望をもって乗り出していきましょう。